

おはなしのへや

日時▼2月3日(土) 14時30分~15時
 会場▼2階ハイビジョンシアター
 対象▼興味のある方どなたでも参加できます。

申込み不要・入場無料

■今回のおはなしのへやは「節分」にちなんだお話を遊び歌をします。

人形劇団べんべろべえ公演 人形劇「チーズがたべたいねずみくん・他」

日時▼2月22日(木) 午前11時~
 会場▼2階ハイビジョンシアター
 入場料▼無料

内容▼北島町のアマチュア人形劇団・べんべろべえの
 楽しんで公演! 赤ちゃんも大歓迎です。申込不要。
 主催▼人形劇団べんべろべえ
 (代表: 兵頭 088-698-6652)

おはなしの勉強会

日時▼2月25日(日) 14時~15時
 会場▼2階ハイビジョンシアター
 講師▼湯地由美さん

(四国大学生生活科学部児童学科准教授 絵本専門士)
 対象▼興味のある方どなたでも参加できます。読み聞かせボランティアなどの活動される方におすすめ!
 ■紙芝居の魅力とその活用についておはなしいただき実際に体験してみます。

申込み不要・入場無料

北島町立図書館・創世ホール文化講演会 佐藤利明◎講演会 「笠置シズ子ブギウギ伝説」

日時▼令和6年2月24日(土) 14時30分~16時30分
 会場▼3階多目的ホール 入場無料



講師▼佐藤利明(さとう・としあき)氏
 (娯楽映画研究家、オトナの歌謡曲プロデューサー)
 主催▼北島町立図書館・創世ホール

講師からのメッセージ

■朝ドラ「ブギウギ」のモデル・笠置シズ子さんは、香川生まれの大阪育ち、歌って踊ることが好きな風呂屋の娘がいかにしてブギの女王になったのか? 昭和初期の少女歌謡時代、戦前のスウィングの女王時代、敗戦直後の人々を明るくしたブギの女王時代を昭和のエンタテイメント、風俗史とともに語ります。

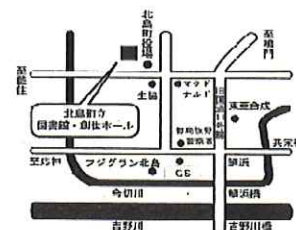
受験生応援企画自習スペース貸出

2月						
日	月	火	水	木	金	土
				①	2	3
4	5	⑥	⑦	⑧	⑨	10
11	12	13	⑭	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	⑳	㉑	㉒		

上記カレンダーの丸印の日に自習スペースに貸出を行います。詳しくは、北島町ホームページ、館内にあるチラシ等をご覧ください。電話等での予約、座席指定などはできません。ルールを守ってご利用ください。

※創世ホールに来場される方へ※

- ▼入場される方の、マスクの着用は個人の判断に委ねることとしております。
- ▼令和5年5月8日からは座席数制限を解除し、貸しホールイベントについては主催団体等の判断に委ねるものとしています。
- なお、今後の感染症拡大状況に応じて、対応を変更することがあります。ご迷惑をおかけしまして恐れ入りますが、ご協力くださいますようお願い申し上げます。



山田太一さんの思い出(上) ●小西昌幸

■2023年11月29日、著名な脚本家の山田太一さんがお亡くなりになった(享年89。お生まれは1934年6月6日)。老衰と伝えられた。北島町立図書館では、2023年12月初めから2024年2月初めまで、山田さんの追悼展示をした。

■北島町立図書館・創世ホールは、2015年2月8日に、山田太一さんの講演会「こんな家族を書きました～『早春スケッチブック』がめざしたもの」を開催した。だから北島町と北島町立図書館・創世ホールは、山田さんには、大きなご縁とご恩がある。

■私は、講演会の企画立案、出演交渉、当日の進行、県内移動(空港～会場～宿舎～各種施設)の送迎などを担当した者として、山田太一さんの思い出を語っておきたい。

■元々、私は、山田太一さん脚本、小倉一郎さん主演の「それぞれの秋」(1973年9月6日～同年12月13日、全15回、TBS系)というテレビ・ドラマが大好きで、10代終わりに随分心情移入をして、観ていた。やがて「早春スケッチブック」(1983年1月7日～3月25日、全12回、フジテレビ系)に完全に打ちのめされた(私は「男たちの旅路」には、あまり深い感情移入はしなかった。鶴田浩二さんとの対比を際立たせるためだと思うが、水谷豊さんが演じた青年がとても薄っぺらで軽薄に思えて、あまり感心しなかった)。既に社会人になっていたのだから、なおさら、激情ほとばしるような思いで、ドラマと対峙することになったのだと思う。

■「早春スケッチブック」でとりわけ、身に染み込んだのが、山崎努さん演じたエキセントリックなカメラマンの挑発的な言葉の数々だった。その中でも第8話での言葉は、極めつけと言ってよいほど重たく、激しく心を揺さぶられた。そしてそれは、その後今日に至るまで(つまり40年間以上も)、私の心の中のある種の指針(心の支え、心棒、あるいは行動原理や思考原理の核心のひとつ)になっている。その言葉はチラシのオモテ面にも使用した。次のような言葉だ。

「一体、お前らの暮らしは、なんだ！(略) どうせ、どっかに勤めるか？ どうせ、たいした未来はないか？ バカいっちゃいけねえ。そんな風に見切りをつけちゃいけねえ。人間てものはな、もっと素晴らしいもんだ。自分に見切りをつけるな。人間は、給料の高(たか)を気にしたり、電車がすいて喜んでるだけの存在じゃあねえ。その気になりゃあ、いくらでも深く、激しく、ひろく、やさしく、世界をゆり動かす力だって持てるんだ。偉大という言葉が似合う人生だってあるんだ。親父に聞いてみろ！心の底までひっそらうような物凄え感動をしたことがあるかってな！自分をみがくんだ。世界に向かって、俺を重んじよ、といえるような人間になるんだ。」

■私が衝撃を受けたのは、「どうせ、どっかに勤めるか、どうせ、たいした未来はないか、そんな風に見切りをつけちゃいけねえ」の部分だった。それから「人間は給料の高を気にしたり、電車がすい

てて喜んだりするだけの存在じゃあねえ」の箇所。極めつけは「親父に聞いてみろ、心の底まで引っさらうような物凄え感動をしたことがあるかってな」という言葉だった。

■私は、家から自転車で数分(徒歩でも10分以内)の町役場に就職し、手書きのミニコミをコツコツ作っていた。そのミニコミの1993年に発行した11号の表2部分(表紙の裏側)に、大きくこのあたりの言葉を転載した。自分への戒めであり、世間に向けた、ある種の自分なりの決意表明の意味も込めていた。

■音楽でも、映画でも、文学でも、漫画でも、雑誌やミニコミでも、それに会って心を奪われた体験は誰にでもあるはずだ。そんなとき、私は作り手に心から敬意を表したいと思う。私の命の洗濯してくれたことに感謝する、そのように礼を言いたいと思う。

■ところで一方、そのような作品のこと(作品名や作者名や作品のどの部分に心ひかれたかということについて)を、どこかでふいに誰かから真剣な口調で問いかけられた時に、果たしてすぐ思い浮かべることが出来るだろうか、ある日私は自問自答した。だが、好きな映画やマンガ作品のタイトルを即座に想起することが出来なかった。がく然とした。私は、まだまだ修行が足りない。それ以降、気を付けて、常に反芻しようとするようになった。

■山田太一さんの講演会は、2015年2月8日に開催したから、その半年ぐらい前に手紙を書いて出演交渉に入ったと思う。私は、「早春スケッチブック」の放送時にその番組に大変な衝撃を受け、人生の指針となるような重たい意味合いを持って同作品を受け止めて生きてきたので、北島町での講演会は「早春スケッチブック」一本に絞ってやっていただきたいという趣旨の依頼をしたのだった。そして、もしも応じていただけるのならばということで、演題の案として「戦後テレビ・ドラマの極北～『早春スケッチブック』について」でいきたいのですが、という相談もした。

■お電話をかけて初めてお話ししたとき、山田さんは当初、あれは視聴率が悪かったし、もう30年以上前の番組だからねえ、大丈夫かなあ、と少し不安がっておられた。

■私は、ドキドキしながら、いや自分にとって「早春スケッチブック」は大変な作品で、私の人生に大きな影響を及ぼしたとても大切なドラマなのです、と話した。すると山田さんから、それなら、小西さんのために特別にやってみましょうかねえ、そうだ、あなたが聞き役になって下さいよ、と言われた。

■私は心の中で「どっひゃー、大変なことになってしまった」と激しく動揺したが、腹をくくった。また、演題については、自分の作品についての講演なので、「極北」という言葉を用いるのは不遜な気がします、だから別の案を考えますからね、と言われた。私は、山田太一さんは謙虚で誠実な人だと、あらためて電話口で思った。

■チラシのオモテ面には、もちろん私が一番心を揺さぶられたセリフを引用・使用したのだった。こうして「早春スケッチブック」に特化した山田太一さんの講演会は北島町で実現したのだった。

■講演会には、小西が信頼してやまない千葉県松戸市の朗読家・森優子さん(徳島出身、元四国放送アナウンサー)と、同じく松戸市の鈴木之彦さん(朗読舞台の脚本・構成。森さんの朗読作品の脚本、演出などを手掛ける優れた総合プロデューサー)が全面協力してくださり、そのご友人たちも動員してくださり、舞台まわりや楽屋ま

わりのことですいぶん助けていただいたのだった。森さんと鈴木さんには、2013年の根本圭助さん、2014年の小池一夫さんのときにも大変なお世話になっている(紙幅の関係で、詳細は省くが、とにかく舞台まわりのことなどで深く関わっていただいた。私は、お二人に大きな恩義を感じている)。講演会の時点で、山田さんは80歳と8カ月だった。2日間共に過ごした山田さんは、温和だが切れ味鋭い創作者であり、シャープそのものだった。講演会前日と当日の日程は次のようなものだった。下記は当時のメモから転載。

【2015年2月7日】

●午後、山田太一さん、徳島入り。食事の後、鳴門市ドイツ館へ。
●16時、北島町立図書館・創世ホール。図書館の山田太一さんコーナーを見ていただいた後、3階ホールで、入念な打ち合わせ。図書館1階カウンター前の展示物には、『山田太一作品集』全巻もあった。これは小西の友人の三原昭次さんがお貸しくださったもの。

●夜、山田太一さんを囲む会(約10名が、駅前の味祭という店の2階に集まった)。楽しい集まりになった。

【2015年2月8日】

●「徳島新聞」朝刊地方面に「創世ホール通信」20周年の記事が大きく載った。この日の講演会に誘導する巧みな構成になっている。

●10時、ホテルへ。山田太一さんを出迎え、徳島県立文学書道館。企画展《万葉集～いにしへの心をたずねて》、文学収蔵展《海野十三の探偵小説 名探偵帆村莊六の世界》をじっくり鑑賞。山田太一さんに喜んでいただくことができた。企画担当の亀本さんがずっと案内してくださり、山田さんは熱心に質問をしておられた。

●12時、北島町立図書館へ。喫茶店・ほととぎすにてオムライスの昼食。

●14時半、山田太一さん講演会開会。立ち見が出る大盛況(約400名)でビックリ。

●16時半過ぎ終了。サイン会は長蛇の列。

●北海道や東京、香川から来た「早春スケッチブック」ファン(山田太一ファン)の女性トリオともお目にかかり挨拶することができた。ありがたいことだ。

●18時、空港へ山田太一さんをお連れし、握手をしてお見送り。

●この催しをご支援くださったすべての皆さんに感謝します。ありがとうございました。(次号に続く)

▼下写真は、創世ホール3階控室で(鈴木之彦さんご提供)。前列右から山田太一さん、小西。後列右から鈴木之彦さん、森優子さんほか。



2015年2月8日(日) 山田太一氏講演会記念